

カキ炭疽病の秋期防除においてイプフルフェノキン水和剤は有効である

カキ炭疽病の秋期防除において、イプフルフェノキン水和剤は慣行薬剤と同等以上に防除効果が高く、収穫時期が近い秋期の防除薬剤として有効である。

農業研究センター果樹研究所病虫化学研究室 (担当者: 中村桂介)

研究のねらい

8～9月のカキ炭疽病の秋期防除で使用される薬剤は、効果が高いことに加え収穫まで日数が少ない場合でも使用できることが求められる。しかし、これらの条件を十分に満たす薬剤は少なく、QoI剤など特定の系統の薬剤が連用されており、病原菌の薬剤感受性の低下が懸念されている。そこで、収穫前日まで使用できる新規系統殺菌剤であるイプフルフェノキン水和剤 (商品名: ミギワ 20フロアブル FRACコード: 52) について、カキ炭疽病の秋期の果実感染に対する防除効果を解明し、秋期防除での有効性を検証する。

研究の成果

1. カキ炭疽病の秋期の果実感染に対して、イプフルフェノキン水和剤 4000倍は慣行のクレソキシムメチル水和剤 (商品名: ストロビードライフロアブル FRACコード: 11) 3000倍と同等以上に防除効果が高い (図1、2、3)。
2. イプフルフェノキン水和剤の散布薬液による果実の汚れは、慣行のクレソキシムメチル水和剤と同程度で実用上問題ない (データ略)。
3. イプフルフェノキン水和剤は、防除効果が高く、収穫前日まで使用できることから、カキ炭疽病の秋期防除薬剤として有効である。

成果の活用面・留意点

1. カキ炭疽病の秋期防除において、イプフルフェノキン水和剤を薬剤ローテーションに組み込むことで、秋期防除で連用・多用される傾向にあるQoI剤など特定の薬剤系統に対するカキ炭疽病菌の感受性低下対策として活用できる。
2. イプフルフェノキン水和剤は連用・多用することで病原菌の薬剤感受性が低下する恐れがあるため、年間使用回数は1回を基本とする。
3. カキ炭疽病に対するミギワ 20フロアブルの農薬登録の適用内容は、希釈倍数「2000～4000倍」・使用時期「収穫前日まで」・使用回数「3回まで」である。なお、使用にあたっては、最新の農薬登録内容を必ず確認し、記載事項を遵守する。

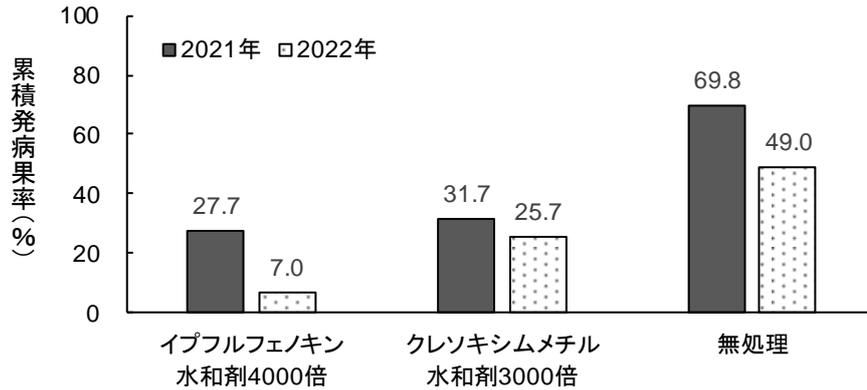


図1 イプロフェノキン水和剤4000倍およびクレソキシムメチル水和剤3000倍処理後のカキ炭疽病の発病果率

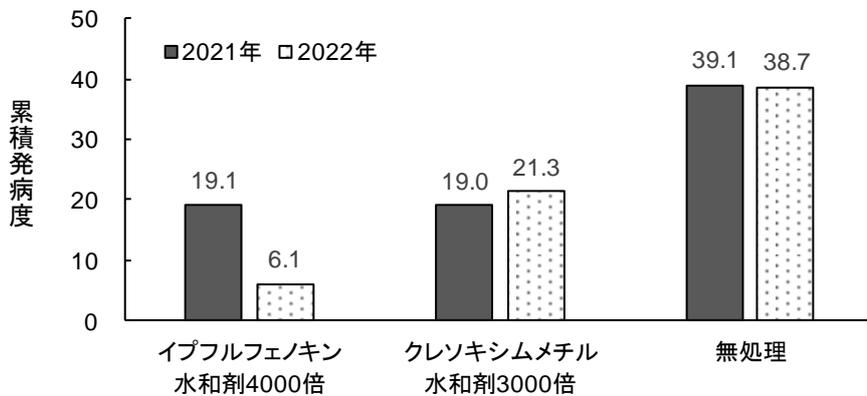


図2 イプロフェノキン水和剤4000倍およびクレソキシムメチル水和剤3000倍処理後のカキ炭疽病(果実)の発病度

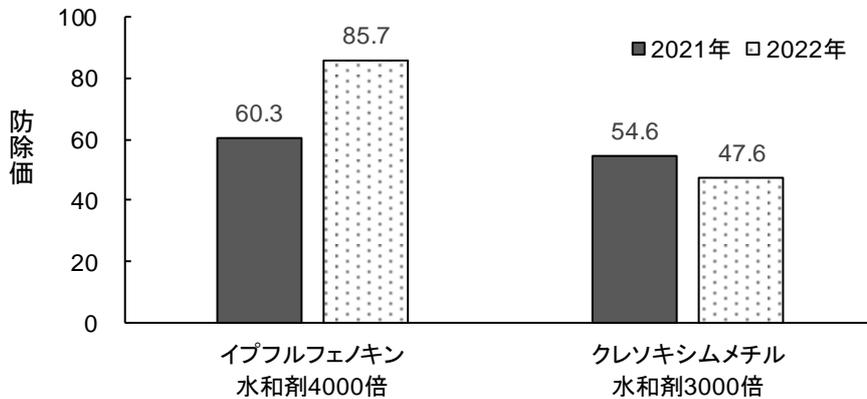


図3 カキ炭疽病(果実)に対するイプロフェノキン水和剤4000倍およびクレソキシムメチル水和剤3000倍の防除値

【試験概要】

場所：熊本県果樹研究所内（熊本県宇城市松橋豊福 2566）

品種：太秋（18年生）

区制：1区1樹4反復

薬剤散布日：（2021年）8月20日、9月1日、9月22日・（2022年）8月22日、9月2日、9月16日

散布方法等：動力散布機を用いて、葉から薬液がしたり落ちる程度に十分量を散布した（約10L/樹）。散布ノズルはキリナシノズル（ヤマホ工業㈱ キリナシセットS）を使用し、散布圧力は1.5MPaとした。

発病調査：1区につき全果実を対象に以下の調査基準に基づき、発病程度を指数別に調査し、発病果率・発病度・防除値を算出した。なお、落果による発病果の計上漏れを少なくするために、試験期間中に複数回（2021年は9月1日～22日に計3回、2022年は9月7日～10月11日に計4回）調査を実施した。

<調査基準>

発病指数 0：発病なし 1：小病斑（直径5mm以下）が3個以下

3：小病斑が4～10個または中病斑（直径5～10mm）が1個以下 5：指数3以上の発病

発病度 = {Σ(指数×発病程度別果数)×100} / (5×調査果数)

防除値 = 100 - (薬剤処理区の発病率 / 無処理区の発病率) × 100